



淀川愛好会 YODORIC NEWS

No. 90 2020 年 6 月 発行

〈社会人の窓 10〉

共に生きる

岡崎 善久

国からコロナ対策において自粛を要請されたことで何処も行かずに、只々アトリエでのんびりと生活をしておりました。侘びしい暮らしの中で孫に「川について」何か教えてあげようと「ふと！」思い、自然と人間：川は生きている（富山和子/作・大庭賢哉/絵 講談社 青い鳥文庫 1984 年）という本を通販で買って、その本の中で素晴らしいエピソードに出会い、子ども向けの本として出版されていますが、川に学ぶ大人たちにも共感していただけたらと考えて、紹介させていただくことにします。

『一つのエピソードをお話ししましょう。静岡県を流れる大井川の中流に、中川根町という小さな町がありました（いまは川根本町）。このあたりはお茶の産地で、町には茶畑が広がっています。

ところで、町のそばを流れる大井川は、まだむかしのままに、堤防がとぎれとぎれになっていました。そのため、川の水がふえるたびに、茶畑や学校の校庭は、水につかってしまうのでした。

県のお役人たちは、気のどくに思いました。なんとかして早く洪水から守ってあげたいと考えました。そこで堤防工事の計画を立て、町の人にいいました。「堤防で、川をしめきってあげましょう。」すると、町のお年よりたちはいいました。「ここをしめきったら、こんどは向こう岸や、下流の町があぶなくなるではありませんか。いまのままで、けっこうです。」こういって、堤防工事をことわったのです。

自然とつきあうには、人間のつごうばかりをおしとおすわけには、いかないものだということを、川とともにくらしてきたこの町の人たちは、よく知っていたのでした。……（中略）。たがいに、あいてのことを考えあいながら、川を守っていたのです。』

昔の日本人は、もともと自然を主体とする自然と人間との関係で暮らす特殊な風土・地形で快適に暮らしていました。農山村では、助け合い・利他ともに生きる精神は、このモンスーンの風土のなかで定住者として暮らしを受け入れていました。明治維新以後、近代化の流れにおいて都市化の波が開発を生み、ここに暮らしと自然とのバランスが崩れ、「水と緑と土」が地球における物質循環として重要であることの理念や哲学が忘れられてしまいました。地域文化として育んだ存在の一つが「川」でしたが、「恵みと災害」の矛盾のなかで、治水に対しての地域共同体も大きく変化してしまいました。

世界的に感染する新型コロナウイルスは、大都市に集中する構造で地域と共に生きる環境のコミュニティを強く意識したのではないのでしょうか。感染が広まり、4 月には緊急事態宣言を発令して、自粛の中で国民は目の前の見えない病原菌の怖さを身にしみて感じたのだらうと思います。今、新型コロナウイルス以後の人類の新たな生活の大転換と、地球温暖化の進む傾向の自然災害を考えると、新たな生活の新たな文明が今後起こる前触れかもしれません。

（岡崎善久建築設計事務所/Yodorik News 編集長）

和田勝己氏のご逝去を悼む

水辺に学ぶネットワーク会長 澤井健二

2020年4月14日、巨椋池流域模型ビオトーププロジェクト（略称：巨椋池プロジェクト）の主要メンバーの一人であった和田勝己様のご逝去になりました（享年77歳）。私が初めて和田様にお会いしたのは、2014年10月26日（日）、京都大学防災研究所宇治川オープンラボラトリーにおけるキャンパス公開イベントの時でした。巨椋池プロジェクトは、同年4月に検討が始まり、8月末から池の掘削が始まって、10月中頃に池に湛水できるようになったことから、京大のキャンパス公開に合わせて多くの方に見てもらおうと考えていたのが、10月25日（土）の京都新聞に掲載され、それをご覧になった向島ニュータウンの中央公園でビオトープ整備をしておられる山崎洋一様がお仲間の和田様にお知らせ下さり、和田様が様子を見に来て下さったのです。当時、私たちのビオトープにはまだ何も生息しておらず、手探りの段階だったのですが、後日さっそく向島中央公園をお訪ねしたところ、山崎様、和田様に加えて福井義定様が公園を案内して下さい、巨椋池プロジェクトに協力して下さいることになったのです。このお三方のおかげで、巨椋池プロジェクトの輪が急速に拡がり、ビオトープ整備の展望が現実味を帯びました。

和田様のお住まいは、淀川愛好会のメンバーである仁枝洋様と同じ伏見区納所で、近くの水路に生息する植物や小魚、貝などを採取しては巨椋池ビオトープに移植して下さい、巨椋池ビオトープはみるみる多様な生き物宝庫に変容しました。巨椋池といえばまず連想されるハスについては、巨椋池土地改良区金子明雄様のお世話で内田ハス園から苗をいただき、オグラコウホネについては、松栄堂長岡京工場で藤井肇様から苗をいただきました。向島の奥田重徳様からはムジナモをいただいています。今、巨椋池ビオトープの名物になっているフジバカマを導入してくださった藤野適宏様、淀川愛好会副会長の今堀浄様と共に巨椋池ビオトープの維持作業を続けて下さっている向島の大西美好様、元伏見工業高等学校の幸野理乃様、京都文教大学の杉本星子様、宇治市立北小倉小学校様、巨椋案内人倶楽部の福本節子様、東一口ふるさとを守る会の山田武司様、伏見区納所の中川佳範様、伏見区向島の画家藤田輝二様、淀の釣り天狗池の安田美喜男様など、和田様のご紹介で巨椋池プロジェクトのお仲間になっていただいた数々の方々との出会いが思い出されます。

和田様との思い出でもう一つ忘れられないのが、高師小僧です。これは、地中にある根や枝といった植物体の周囲に、地下水に含まれる鉄分が水酸化鉄となって付着沈殿し、核となっていた植物体が腐食して抜け落ち空洞化したもので、その形状が幼児を連想させるために小僧の名があるそうで、これが淀川三川合流点の木津川御幸橋下流左岸に見られると案内していただき、採取して宇治川オープンラボラトリーに保管展示しています。

和田様は、また、一昨年病に臥されるまで、巨椋池ビオトープの写真や作業観察記録を数多く残して下さいしています。現在はその続きを今堀様がして下さいしていますが、近日中に整理をして、皆様にご覧いただけるようにしたいと考えています。

和田様、長い間お世話になりありがとうございました。どうぞ安らかに眠り下さい。



2015年春 巨椋池ビオトープへのメダカ放流



2017年冬 立位右から4人目が和田様（撮影：福井義定様）

イベント報告・案内

NPO 法人 日本水防災普及センター 設立総会 開かれる

2020年5月16日（土）午前11時より、NPO 法人日本水防災普及センターの設立総会が Web 会議として開かれました。前号でお知らせしたように、この総会は当初大阪工業大学梅田キャンパスで開く予定でしたが、新型コロナウイルス感染防止のため、急遽 Web 会議に変更したものです。センターの会員数は現在 22 名ですが、当日は委任状 6 名を含めて 20 名の出席があり、定款、事業計画、予算案の承認、役員の選任等が行われました。近日中に NPO 法人の申請を行うべく、鋭意準備を進めています。皆様のご入会、ご支援をよろしくお願いいたします。

今年度の最初の行事としては、6 月の中頃に、京都府長岡京市でマイ防災マップ作成研修を行う予定でしたが、8 月 6 日（木）7 日（金）に延期されることになりました。今年も梅雨入り前から早くも真夏日が続くなど、異常高温や豪雨災害が懸念されますが、加えて感染症予防対策など、危機管理の在り方を見直す必要に迫られています。（S・K）

第 28 回 淀川流域勉強会 Web 会議で開催

2020年5月16日（土）14時より、第28回淀川流域勉強会を Web 会議で開きました。

この勉強会のことは、これまで Yodoric News ではあまり取り上げてきませんでしたが、2015 年 8 月の鬼怒川決壊のニュースを見て危機感を抱き、巨椋池遊水地構想を核に、流域治水について勉強しようということで、2016 年度より 2 カ月に 1 度のペースで、主に京阪電車寝屋川市駅前にある摂南大学地域連携センター（2017 年度からは社会連携センター）駅前活動ルームで行ってきたものです。メンバーは淀川愛好会の会員約 10 名と摂南大学石田ゼミの学生数名が中心となり、輪番で話題提供を行うとともに、テーマに応じて外部講師に来ていただいたり、見学会やシンポジウムを開いたりもしてきましたが、今後はさらに輪を広げ、日本水防災普及センターの部会としても活動を展開できればと考えています。

なお、これまで使用してきた駅前活動ルームは、今年度から用途が変わったため、新しい活動場所を検討しています。（S・K）

「琵琶湖・淀川・大阪湾流域圏シンポジウム 兼 近畿水環境交流会 in 大阪」は秋に延期

5 月 16 日（土）に大阪工大梅田キャンパスで計画していた当行事は、11 月 21 日（土）に延期されました。

天若湖アートプロジェクトも秋に延期

例年夏に行われてきた天若湖アートプロジェクト「あかりがつなく記憶」も今年は秋に延期され、10 月 24 日（土）25 日（日）になる予定です。詳細は次号でお知らせ致します。

琵琶湖・巨椋池・天若湖 3つのみずたまりプロジェクト 巨椋池流域見聞 2020 のご案内

前号で 6 月 28 日（日）開催のご案内した巨椋池流域見聞は、日程を変更して 7 月 18 日（土）に開催することになりました。内容は前回の案内と変更ありません。

日時：2020 年 7 月 18 日（土）10:30～16:30

- 行程：10:30 「京都大学防災研究所宇治川オープンラボラトリー」集合
10:30～12:00 趣旨説明および「巨椋池流域模型ビオトープ」見学
12:00～13:30 昼食および移動（徒歩約 3km）
13:30 京都市南クリーンセンター「さすてな京都」集合
13:30～15:30 見学および討論（高さ 66m の展望台からの眺望を含む）
15:30～16:30 さすてな京都 生涯学習講座（講師：澤井健二）
「巨椋池の魅力～模型製作を通して学ぶ地域環境～」
16:30 「さすてな京都」で解散

主催 淀川愛好会、水辺に学ぶネットワーク、天若湖アートプロジェクト

参加費 無料（昼食は各自持参）

申し込み 7 月 11 日（土）までに淀川愛好会事務局へ



私は以前から生物がどのような環境で活動しているのかに興味を持っていたため、生物を関連させた環境の研究を行っている生態環境学研究室（石田ゼミ）を選びました。

私はそもそも摂南大学には生命科学科として入学していました。生命科学科に所属していたころには、石田裕子准教授が顧問をしていらっしゃるエコシビル部に入学しており、河川での活動に積極的に参加しておりました。そのようにして学生生活を送るなかで、いざ就職のことを考えたときに私が本当にやりたいことは何なのかが分からなくなっていました。そこで様々な方に相談する中で、転学科という制度があることを知り、家族と相談し、転学科することに決めました。転学科するにあたってはエコシビル部の頃からお世話になっていた石田准教授から石田ゼミの研究テーマなどを聞いていたこともあり、石田ゼミであれば私のやりたいことができると思いました。そのため転学科するときにぜひ石田ゼミに所属したいという旨も伝えていましたし、石田ゼミに所属することを条件に転学科を認めてもらえたということもありました。

念願の石田ゼミに所属し、私は研究テーマを木津川高水敷タマリにおける水生生物群集に関する研究に決定し、これから実のある卒業研究を行っていくと決意していました。そのとき私はすでに2月の末に行った調査でのサンプルがあり、次の調査がある夏ごろまでにサンプルの仕分けを早々に終わらせようとしていました。しかし、コロナの影響により大学への通学が6月まで完全に停止されていました。ようやく研究が進められるようになったのですが、溜まっているサンプル、これから始まる夏の調査による新しいサンプルの仕分けが山積みになっています。

例年とは大きく違い、時間に追われる卒業研究となってしまいますので、思うように進まず苦しくなることも考えられます。しかし、そのなかでも一つ一つ課題に向き合い、時には助言をいただき、コロナにも負けない良い1年間にしていきます。

(摂南大学理工学部都市環境工学科生態環境学研究室4回生)

編集後記

新型コロナウイルスが日本に上陸して、約4か月が経ちました。新型コロナウイルス感染症に罹患された皆様と、感染拡大により生活に影響を受けている皆様に、心よりお見舞いを申し上げます。淀川愛好会におきましても影響を受けており、3月から6月にかけて予定していたイベントは中止や延期となりました。そのため、今回のYodoric News 90号は、いつもと違う内容でお送りすることになりました。摂南大学では、ほとんどすべての座学の講義が前期中はオンライン講義となり、その他の実験や実習でも、少人数グループに分けるなどして、学生の感染予防対策を十分に実施することになりました。6月から学生の登校が再開されましたが、キャンパス内の学生は少なく、学生あつての大学だと実感しているところです。

さて、今号では、3つのみずたまりプロジェクトのイベントをご案内しています。3つのみずたまりプロジェクトとは、桂川・日吉ダムで活動している天若湖アートプロジェクトで構想していたもので、古代より現在に至るまで私たちにさまざまな恵みをもたらしてくれている琵琶湖、かつて三川合流域に存在し今は失われた巨椋池、桂川・日吉ダムの建設により新たに生まれた天若湖、この3つのみずたまりをつなげて何かできないか、というものです。これまでも、お互いの地域の団体間の交流はたくさんありましたが、これをプロジェクトとして位置付けるというものです。プロジェクトの活動として、まずはロゴマークの制作を行いました。デザインは、これまで天若湖アートプロジェクトのポスター等を手掛けたデザイナー・映像作家の中塚智子さんをお願いしました。3つのみずたまり、それぞれに特徴的な植物や魚をあしらった和風の素敵なデザインになっています。今後、本プロジェクトに関わるイベントには、どんどん載せていく予定です。

世間では「新しい生活様式」が提言され、今後の市民活動も大きく影響を受けることになりそうです。私たちの活動も、感染予防対策を十分に取しながら、再開していくこととなります。皆様におかれましても、まだまだ気は抜けないと思いますが、どうぞご自愛ください。

石田裕子（淀川愛好会総務／摂南大学理工学部都市環境工学科准教授）